北陸新幹線で地域が動き出す

3月14日の北陸新幹線開業を間近に控え、開業を待つ金沢、高岡、富山、黒部、糸魚川、上越、飯山……。各地域の膨らむ期待と戦略を総力取材した。

写真提供：JR東日本

北陸新幹線のターミナル駅がある石川県金沢市では、来訪者の大幅な増加を見越して、早くから準備を進めてきた。開業を目前に控えた今、まちはどのような変化を遂げているのだろうか。

100年に一度のチャンス

大正2（1913）年に全線が開通した北陸本線が、一昨年の平成25年に100周年を迎えた。開通当時、北陸本線は沿線に絶大なプラスの効果をもたらしたと想像される。今回の北陸新幹線開業も金沢にとって地域活性化の「100年に一度のチャンス」と言えるだろう。

これを生かすべく金沢商工会議所が具体的な活動をスタートさせたのは19年のこと。「新幹線対策特別委員会」を設置し、JR全社が展開するデスティネーションキャンペーン（自治体や観光業者と協働で実施する大型観光キャンペーン）の誘致、金沢駅やバスターミナルの案内表示の改善、バスの利便性の向上などを、積極的に関係機関に提言・要望してきた。

20年には、おもてなしを推進する「ようこそ金沢推進協議会」を設立。観光、宿泊、飲食、小売、旅客運輸の団体・企業を対象に「もてなし力向上セミナー」を開催し、来訪者の満足度を高めるソフト面の充実に努めてきた。昨年からは「ざわもて運動（かなざわ商工会議所会員事業所がみんなで行う〝おもてなし運動〟）」を展開。来訪者に直接対応する物販店や飲食店、ホテル、交通機関をはじめ約6000の会員事業所に、おもてなしを分かりやすく紹介したチラシを配布するなどホスピタリティの向上を図っている。また、東口、西口となっていた駅出入り口の名称を分かりやすく「兼六園口」「金沢港口」に改称することになったのも、「おもてなし」の一環として同所が関係機関に働きかけて実現したものだ。

伝統と革新の調和するまちづくりで人を呼ぶ

金沢商工会議所

石川県金沢市

▲JR金沢駅東口にあるまちの象徴的存在で、伝統芸能に使われる鼓をイメージした「鼓門（つづみもん）」。北陸新幹線開通に合わせ、東口は兼六園口、西口は金沢港口と、名称が変更される

◀「ざわもて運動」を広く啓蒙（けいもう）するために作成したチラシ。「かなざわ もて子」はそのナビゲーターだ

「新幹線が開業した他地域をずいぶん視察しました。例えば、東北新幹線や九州新幹線が開業したとき、沿線地域ではどのような取り組みをし、それはどのような影響をもたらしたのか。また開業後の様子なども学ぶことが多く、非常に参考になりました」と同所の深山彬会頭は振り返る。

駅周辺に起きている変化

まちにもさまざまな変化が起こっている。金沢は、中心市街地や観光スポットが駅から離れている。そのため、駅はこれまで出発地的側面が強かった。しかし北陸新幹線東京－金沢間開業により、駅周辺には飲食店が次々と出店し、兼六園口周辺のテナントビルはすでに飽和状態だ。金沢港口周辺でもオフィスビル、ホテル、マンション、商業ビルなどが次々とオープン。駅周辺ににぎわいが生まれつつある。そして、中心市街地でも再開発やマンションの工事が進んでいるほか、ホテルや百貨店の改装も行われており、受け入れ態勢の準備が進んでいる。

また、新商品の開発も盛んだ。例えば食料品では、